

れないものは決して望まない。……幸にも彼等は老年も情熱も知らない。強い感情をかき立てる妻も子も恋人もない」と大学教授 Helmholtz は言っている (B. N. W. P. 183)

註 11: …… which meant, in practice, not doing anything at all. (B. N. W. P. 80)

註 12: 幼児の条件反射訓練の中に花や風景に恐怖と嫌悪感を抱かせる訓練の一場面があるが、之に対しては「風景を愛した所で工場繁栄の足しには少しもならない。それでとにかく労働階級には自然愛を禁じてしまつた」(B. N. W. PP. 30—31) と言う所がある。此処まで来れば、我々は諷刺の針を感ずるのである。“Time is money” なる諺を神とする生活への諷刺を感ずるのである。

註 13: 「この本が書かれた時、」人間は insanity と lunacy との何れを選ぶことも自由であると言う考えを私は持つて居り、この考えを面白く思い又眞理であると思つていた (B. N. W. の序文 PP 7—8)」と言う Huxley の文を見ると当時の彼がゆがめられて行く人間生活に対して相当厭世的な氣持を持つていたことがうかがえる。

Huxley の B. N. W. は単なる空想でなく生物学、心理学、化学の最高の実験と智識の集積から成る貴重な研究の成果であることを感ずるのである。創作当時の彼の人間観から考えて諷刺の気持も強かつたであろうが、むしろ一般に考てられている以上に真剣な探究心が主たる motif であつたと感ずるのである。 (以上)

註 1: 作中アメリカが意識されていることを示す用語は— **After Ford** 632 年の世界; **Ford** の **History is bunk.** と言う放言が新世界の起点となつてゐること; **Reservation for American Indians** が旧文化圏とされていること; 1946 年に付けられた本書への序文に「この作中に書いた性的乱交は近い内に事実となつて来るだろう。既にアメリカの数箇の都市に於ては結婚数と離婚数とが等しくなつてゐる。数年後には 12 ヶ月の期限付で犬をとりかえてもよし又一時に二匹以上を飼つても差支なしという条件付の犬の鑑札と同じ形式で結婚許可証は賣出されるであろう (B. N. W. P. 14)」

註 2: **Mussolini** の野蛮的な國家主義の狂態を強く批難している (E. M. P. 33)

註 3: **Well-intentioned Postulates with evil means** の政治家の代表として **Stalin** を批判している。 (E. M. P. 35)

註 3: **Super State**=(從属諸國家を支配する) 超國家

註 5: 卵に 8 分間の X 光線を当てると一度發育が中止されて、2~4 卵に分裂する。次に二日後低温度の中に入れると又發育中断の後分裂を起す。更にその卵をアルコール滴下で死滅直前までいぢめると更に分裂し、この様にして一卵から 80~96 人の双生兒を得る法 (B. N. W. P. 18)

註 6: **Lenina** と言う娘が一人の男を愛して交際をつづけているのに対して友人が忠告する。「たつた四ヶ月だつたつて?、その間他の男の人とは全々交際しなかつたんでしょう。本当に注意して下さいよ。一人の男とそんなにして交際するのは恐ろしいことよ。所長さんはどんなことにでも熱中したり長く執着することは決して許されないのだから」と。この所長が曾ては自分も熱烈な戀愛をした後、女を不幸のドン底に陥れたまゝ、知らぬ顔で現在の地位について居ることが後に曝露される点や註一の離婚問題への言及などに依つて之が痛烈な現代の戀愛への諷刺であることはうなづけるのである。

註 7: **Community, Identity, Stability** (B. N. W. P. 16)

註 8: 堀正人著 ハクスレイ研究 P. 69

註 9: 大阪図書出版社: ハクスレイ短篇集 PP. 48. 49

註 10: 「鉄がなければ自動車は作れない—— 社会不安がなければ悲劇はつくれない。

今は世界は安定している。人々は幸福である。慾するものは何でも得られる。得ら

暗示法のねらっている所もうなづけるのである。

精神改革の方向については「三千年にわたる人類の理想とする目標は一つの方向に向っている。イザヤからマルクスに至るまで目標は一つである (E. M. P. 1)。理想の人間像を一語で表現することは困難であるが **Non-attached man** という語が恐らく最も適切な語であろう。それは肉体的な欲望、物慾、権勢慾、愛憎、排他的愛情、名利等に囚われない人、科学にも芸術にも囚われない無執着の人である (E. M. P. 3)。

この **non-attachment** の倫理は常に現象界の底にある精神の世界に関連をもつて来た。**Non-attachment** とは消極的な語ではあるが、そこからすべての美德は発足するのである。慈善も勇気も 智も無私の行も **Non-attachment** を基盤として育つものである (E. M. P. 4)

上に引用した様な「無執着」の倫理を育てるための構想として人工ふ化による父母と子の間の愛情の否定、排他的な恋愛の否定^(註6) **soma** 飲用による激情の緩和、物資の配給制、等々の訓練と制度がとり入れられている。あらゆる独占あらゆる興味の集中は社会の安定性のために有害であり、無益なる精力の浪費と考えられているのである^(註11) ことまで社会の安定性確保のために一滴の水も漏らさぬ構想を進めて行く **B. N. W.** の人々の徹底ぶりは目標を見失っていない点では **Huxley** 自身も言っている如く^(註13) 確かに気狂いではないが、幾分正気の間人ではないと言う印象をうけるのである。社会の安定性のためにすべての人間性を喪失して「無執着」となつたがために仮空なる別世界の人間を見る様な空虚感をまぬかれない。彼のこの倫理にはどこか誤謬があるのではないかと言うことを感ずるのである^(註12)。この点については **B. N. W.** の序文 (**B. N. W.** 発表後 24 年目につけたもの) の中に「**B. N. W.** の正気を逸した生活及或意味では人間性を失つてはいないけれど奇怪なインディアンの村の原始生活と言う両極端の間の何れかを人は選ばねばならなかつた。この点が本書の重大な缺点である。……若し今私が書き直すとすれば私は第三の道を提案したい。**B. N. W.** と原始生活との中間に人間性の可能がある—サモアやアイスランドに **B. N. W.** から追放された自由人の生活である」(**B. N. W.** PP. 7—8) と言う主旨のことを述べている。

尙 α 階級の人々の結束強化日のことを前に述べたが、この集会は12人から成っている。この12と言う数も **Huxley** は慢然と空想したものではないらしい。**E. M.** の中にグループの心理学的研究が紹介されているが「**crowd** は多数人の集り、**Group** は少数人の集りである。**Crowd** は智的感情的に構成各員のそれよりも低劣である。**Group** のそれは構成各員に劣らぬばかりか却つて高揚される。実験の結果 **Group** の人員が5人以下又は20人以上になると質的に低下する(手仕事の場合は例外であるが)。8—12人が精神的な会合の為には最適である(共産党細胞が10人単位である如く)」(**E. M.** p. 71) と言っている。この様な資料に出会う時、

ものであることを我々は忘れてはならない。しかも原子力解放も未来の夢と思われていた 1932 年の彼の意見がこれであるから、原子力時代の初まつた現在の彼の科学に対する警戒は真剣なものであるに違いない。

(五) 社会観と倫理観

Huxley は漸進主義者である。ソ連の様な高速度鋼的な独裁主義は暴力の悪循環をもたらすと言う意味で強く警戒しているのである (E.M.P. 48)。そして B.N.W. の構想に於ては生産手段の公営化を理想とするが、これは必ずしも今までの労働者隷属を廃止するという結論にはならない。工場及農場の「権力による経営 (軍事訓練、独裁者、特権官僚、新聞統制、秘密警察に依る) と公営」とが共存し得るものであることはソ連の実例が証明している。資本主義国の多数の小独裁経営者への隷属から信頼出来る国家的権力の下に移されるだけのことである (E. M. P. 50)

この前提の下に Huxley は自治制の研究を進めフランスの経済学者 H. Dubreuil を産業自治制の権威者としてその説を引いている：—「民主国の工場も互選でなく上から任命された監督によつて支配されている現状であるが、Dubreuil 氏の案では如何なる大工場も 30 人位から成る自治的グループ (下請負の形で) が系統的に配置されることによつて運営されることが出来る。この形式の場合には経営が国家であつても、資本家であつても、協同体であつても同じである。要するに労働者は天降りではなく自らの責任に依つて指導者を選ぶ点で盲従の暗黒感から救われるのである (E. M. PP. 74—75)

更に彼は「万人が完全に平等の収入を持つことは実現不可能であり、又恐らく望ましくないことである」が然し平等化の努力は惜んではならないこととして財産相続税をその有力な一例としてあげている (E. M. P. 161) そしてたとい同一収入を得ている人々でもその住む世界は全く別で融合理解の不可能な場合が多いことに言及し、或人は木星をめぐる衛星をも肉眼で見分ける位に視覚が鋭く、或人は香水の組成成分となつている 20 の原料を鼻でかぎ分ける位臭覚が強く、或人は他人に分らぬ音階の微妙な差をきき分けると言う風な個人の住む世界の差異を指摘している (E. M. P. 64) A square peg in a round hole と言うことばが B. N. W. にも E. M. にも度々用いられているが、彼が各人の性能と特質と言うことを如何に尊重しているか分かるのである。

以上の様な思索の上に、B. N. W. に於ける五階級の人々が構成されたのである。けれども彼は「所謂進歩的な人々の間には社会構造の改革によつて人類の理想は達せられるとするのが通念となつている様であるが、経済及政治機構の改革は所謂予防倫理であつて人々を外から保護する為の改革でありその効果の大きいことを種々の実例をあげて述べた後、結局に於て精神の改革こそ不可欠のことである (E. M. PP. 16—17) 単なる制度の改革だけではこれに次ぐ別の悪を生むだけであることも多いと説いている。この言葉に依つて一見気狂じみて見える B. N. W. の幼児催眠

「ではあなたも何故追放を希望しないのか」という質問に対して

「私は離れ島で純粹理論としての科学をどこまでも探究すべきか又はこの B. N. W. に留まつて統治の後継者となるべきかの撰択を迫られた。そしてこゝに留まることを撰んだのだ。……時々私は科学と別れたことを悔ゆる心になる。幸福とは難しい相手だ。他人の幸福を考えてやることは更に難しい。それは純粹真理探究よりも困難な仕事だ。然し責任は守らねばならない。自分の好悪は言つて居られない。私は科学と真理を愛するが、真理は社会への恐威となり科学は大衆を危険に陥入れる。…Truth と Beauty の探究よりも Comfort と Happiness が選ばれたのである。大量生産がそれをさせたのだ。万人の幸福を確保すれば世界は故障なく運転する。Truth と beauty ではそれが出来ないのである。大衆に関する限り重要視されるのは truth と beauty でなく happiness である。…それでも真理と美を探究する者の為に離れ島のあることは喜ばしいことである。この人々を監禁しないで自由に探究せしめ得るから。」(B. N. W. PP. 187—189)

上の会話を見る時我々は B.N.W. に於ける階級性の嚴存を支持する著者の思想を仄かながら理解出来る様であるが、この考え方の基礎をなすと思われるものに彼の短篇 'Young Archimedes' がある。その中で僅か六才のイタリヤの天才児 Guido がバツハやモーツアルトの曲を批評し、アルキメデスの原理を路上の敷石の上に木炭の破片を以て独力で証明して行くのを見た時、その天才児の前に犬の如く膝を折つて礼讃したい心持になつて「天才こそ真に人間と呼ぶべきだ。人類初つて以来真の人間は数千人しか生れなかつたと思う。その他の人間(私を含んで)はすべて教育し得る動物に過ぎないんだ。天才者がなかつたら、我々は自分では殆んど何物も発見出来なかつたであろう。……一世代の間に一人の真人も生れなかつた時代さえある。…現にアルキメデスが自身に比べ得る後継者を得る迄に千年以上を経たではないか」(註9)と述べている所から考えると、Huxleyの目に人間世界の現実を決して高い教養と感性を恵まれた人々の世界に進歩して行く可能性よりはむしろその反対に近いものとして映じたと思われるのである。

科学に対する彼の懷疑にも深刻なものがある。「洪水の如く放射能を發散させる結果はどうなるか我々の予測をゆるさないものがある。その結果は地球上の全生命の根絶となるかも知れぬと考へている人々もある。アインスタインもその一人である」と Russel は言つている。科学と言う銘刀を一心にとぎ澄ますこと、真理の探究に脇目もふらないことだけでは却つて人類を傷ける結果を招くであろう。之は言い古されたことではあるが、Huxley の場合はお題目に言つて居るだけでなく B. N. W. の中に於て真劍にこの問題と取組んでいるのである。結局は魔王の黒い翼の如く科学がその暗い蔭を社会の上に投げている現代の段階に達すれば真理探究と芸術美の追求を放棄する(註10) と言う高価な犠牲を払つてでも人々に新しい社会性を養わせる為にのみ、物理学も化学も心理学も用いて行くより他に人類の生きる道はないことを考えさせられるのである。彼の科学者に対する諷刺と警告が実に深刻な

この様にして不断に個性は抑圧されている。

「何故この世界に住むすべての人を α 人に作り上げようとししないのか」と言う問に対して、B. N. W. の統治者は答える：—

「我々の世界では幸福と安定を重視するからである。 α 人ばかりの社会は必ず不安定と不幸をひき起す。自由なる判断力と責任感を持つ α 人ばかりの働く工場を想像して見よ。彼等に ϵ 級の人の様に物を考えない労働生活をさせると気狂になる。 ϵ 人は幼児の時から工場労働をする様に物理、化学、心理的に条件訓練をして育てられて来ているのである。彼等にとってこの他に道はなく又これを幸福と思つていたのである。一日七時間半働きそれも α よりはずつと心を勞しない単純な仕事をして後は *soma* の入った食事と娯楽と自由な性行為と *feely* (感覚も匂いも実感として伝えられる映画) を充分に楽しめるのである。現在の科学でなら一日三時間労働に縮めることは容易であるが、余暇が過多であることは結局人々に不安定と過剰な *soma* 消費をもたらすだけで不幸の源となるばかりである」(B. N. W. PP. 185—187)

こゝに Huxley は大きなデレンマを感じている。「科学を全々放棄して原始生活に帰るならば人口は往時の状態に百年ではなく百週間の内に逆転するであろう。飢きんと瘦れいとが本格的な迅速を以て猛威をたくましくするであろう」と '*Science in the Changing World*' (1933) (註⁸) の中に彼は言つていたのである。科学と産業はこの様な力を持ちながら、同時に人々の持つていた自由の或領域をグングン縛り上げて踏みに行つて行く。如何に嘆いてもこの傾向は進展して行く。こゝで想起されるのは *History is bunk* という言葉である。「すべての独裁者は歴史的な権利ということでは自分の支配権を神聖化する。神聖なる伝統としてあらゆる奇怪な政策を正当化している。被压制者もこのことばをきいて兇悪の压制者を崇拜する」(E. M. P. 61) と言つて *historical* という語の持つ魔力に対して彼は警戒している。我々が「思うまゝ行動出来た」頃の自然的自由がせばめられて行くのを嘆いて人間的生活の余地がなくなつたことを悲しむのも過去をふりかえりそれにこだわるからである。新世界と共に新しい自由の分野も開けつゝあることを我々は思うべきであると言う考え方にも読者は導かれるのである。

進展して行く科学の新世界を避け難いものとするならば、その世界での人類の在り方は如何。

B. N. W. の中で少数の支配者企画者として生活している α 級の人々にも同様の深刻なデレンマがある。統治者 *Mustapha Mond* の告白を摘録してみると：—

「芸術のみでなく科学も十分に制御し口輪をはめておかねばならないのだ。そう言う重大な犠牲を払わねば、我々の社会の安定性は得られないのだ。……自意識が強くて社会に順応出来ぬ人、この社会に満足せず独特の思考を持つ人は追放されて離れ島のサモア島ででも、アイスランドででも生活すべきである。私はその人々が羨ましいのだ……」

は述べているのであつて彼自身の人間の自由に対する希求はカント以来考えられて来た理想的な自由の世界ではあつても、現代社会が進展すればする程、その様な自由は不可能となりつゝあることを彼自身も感ずるのであろう。全体主義的傾向を何とか阻止し得る力はないものであろうかと言う嘆きと悩みは彼の心に充ちて居るのであろう。「地方分権への大規模な大衆運動のみがこの国家主義の進展を制御することが出来るけれども現在の所その様な運動は現われていない」(B. N. W. の序文 P. 12) と言つている。純理論の世界は別として、少くとも現実につながる強い興味をもつて、この B. N. W. を読ませる為には全体主義的傾向と人間の自由の調節という問題こそ Huxley を悩ませる大問題である。

B. N. W. に於ける人間の生涯は先づ人工ふ化、次に幼児期に於ける催眠暗示によつて階級意識、社会意識、美意識等あらゆることに対しての教えを 62000 回もくりかえして B. N. W. の住人としての条件を一步もふみはずさない様にしつけられる。恋愛に対し^(註6) 避妊法に対し、死に対しての無意識的訓練に依つて各階級人は皆一様な考え方と行動をする様条件づけられ要請されているのである。時には怒、恥、恋愛、憤激の心が胸に湧き立ちそうになると soma という沈静剤を 2g も呑むと平静な気分となつて何気なくそこを乗り切つて行く。B. N. W. の人には soma は一刻もなくてはならぬものである。麻痺的な薬 soma に依つて一生涯の間辛うじて人間的な個性的な心持を抑圧しつゝ生きねばならぬと言うことは読者にとっては深刻な失望である。原始社会に育つた男が B. N. W. につれて来られて、その母が soma を呑んで死の恐怖も苦悩も知らずに別れも告げずに、安楽に息を引とつた時、「母は奴隷として死んだ、他の人々は自由に生きさせねばならない。そうすれば世界は美くなるであろう」と気がつく自分の進む道がハハツキリと見える様に思えた。そして soma を労働者に配給しようとする男に近づいて「止めよ。それは精神にも身体にも毒だ。その恐ろしい毒をすてよ」(B. N. W. PP 175—176) と叩ぶ。あらゆる隅々にまで行わたつた科学施設に依つて一分も無駄のない、一日として病氣におそわれることのないすばらしい文化生活を送れる B. N. W. の到来を Huxley は期待したのであるが、然しこの様な新世界を維持経営する為には人々は「自由」と言う最も大切な魂を犠牲にせねばならないのである。

(四) 真理か幸福か

学問の自由、芸術家の自由の限界と言うことがこの節のテーマである。

B. N. W. を支配するモットーは“共同社会同一状態安定性”^(註7) であるが、前述の如くこゝでは五つの階級に共通する生活は一つもなく、まるで別種なる五種の生物の如くでありながら、そのすべてを支配統合するのが α 階級である。隔週木曜日が α 人達の結束強化日になつていて soma の入つたアイスクリームをたべながら「自己滅却の為に乾盃す」と叫んで、社会の動きの中に自己を完全に没入する訓練をうけることになつている。

B. N. W. の人間革命に於て前述の人工ふ化につゞく最も強力な方法は *hypno-paedia* (幼児期催眠暗示法) である。幼児は眠っている間に拡声器によつて夫々の階級にふさわしい階級意識を吹き込まれるのである。例えば β 人に対しては「 α 人は我々よりはるかにひどく働く。それは素晴らしく賢いからである。私は β と生れたことを喜ぶ。私はそんなには働かない。それでも私は γ や θ よりもはるかに優れている。 γ は馬鹿である。オ、オ、私は δ の子供とは遊びたくない。そして ϵ 人は尙下等である。彼等は全くの愚か者で……」(B. N. W. PP 34—35) と言う放送を 150 回づゝくり返して週三回 (火木土) 眠っている間にきかされて催眠術的に階級意識を心にしみ込ませられる。これが三ヶ月間つゞくのである。こゝではすべてが催眠法によつて教育され成人してしまつた立派な α 級の男女も定期的に 12 人でグループを作つて「各個人を滅却して一つになろう！ 個我を滅却しよう。個我の終る時こそ大我が初まつたのである」(B. N. W. PP 74—75) と誓う人々は六万二千回もくり返される暗示によつてすべてを反射的に行動している。自分独自の行動は許されないのである。

Huxley とても Wells の如く人道主義的な理想社会の夢を見ない筈はないと思う。然し理念だけの追求ならばいざ知らず、社会の実状を基盤としつゝ、社会の行きつく方向を追求して行つたが故にこの様な陰惨な階級の姿が作者の心に浮んだのであろう。

Huxley は *Ends and Means* の中に *Large Scale Social Reform* (P.16以下) の題下に「政治的経済的社会機構の改革によつて人類社会の理想は達せられると信じている有識者は多い。之も強力な方法ではあるが心の革命こそ根本的な問題である」と言う主旨を述べている。この立場から B. N. W. の社会機構を担う人々の上に心理学的生理学的手段と訓練が極端に応用されたものと思われるのである。これは 1937 年発表の意見であるが、B. N. W. の序文 (1946 年につけたもの) に「新たに原子力の解放が進展して人間の生活様式には更に非人間的なる原子力に適合するための変革がもたらされることが予想される。この問題が B. N. W. から除外されていることは遺憾であるが、科学が人間生活に及ぼす影響は第二義的なものであつて、人間に取つて致命的なものは生物学、物理学、心理学の未来に於ける研究発展が人類の生活に及ぼす変革である」と言つている。人間革命でなくては今後の複雑なる社会は到底維持されないとする彼の立場が現在も尙変つていないことが推知されるのである。Wells の理念的空想的なのと違つて Huxley の描く未来社会は一層科学者らしい実証精神から創造されたものであることを理解せねばならないと思うのである。

(三) 自 由

「大量生産社会と資本なき大衆の増加は常に経済及社会に混乱を生じて来た。之を調整する為には中央集権的な統制力が強化され、その傾向の発展は遠からず世界をあげて全体主義的政治の下におかれるであろう」(B. N. W. の序文 P 12) と Huxley

次の機械には鷲鼻赤毛の 56 人の r 人間が、又或所では頭のひよろ長い顎のつき出した骨盤のせまい 33 人の δ 級の女がネヂ釘を切っている (B. N. W. P.135) この δ, ϵ 級人の姿は犬か猫を思わせるものである。ネヂ切の仕事を与えられれば一生涯それ以外のことは知らないのであり、しかもそのネヂはどこに用いられるかを知らないのである一鼻らしいものも持たない扁平な頭の 83 人の同じ型の人間が自分の生活について何の考も反省もなく一生を労働しつゞける工場。それは実に暗い気分のみなざる夢魔の世界である。人造人間。代用人間。正に地獄であると読者は感ずるであろう。しかも読者は之が Huxley の頭脳の中に生れた単なる幻想ではなく、確に現代文明の中にその現象が芽生え初め、今著者が描いている様な機械と科学が神様となるであろう所の「素晴らしき新世界」に向つて進展しつゞあることを感じ、ぬぐい去ることの出来ない暗い懐疑の心をうえつけられるのである。確かに彼は現代文明に対して深い懐疑を以て批判の目を向けているのである。B. N. W. が 1932 年発表以来機械文明批判の書として常に話題にのぼる理由がうなづけるのである。

自動車王 Ford が一日五弗の最低賃銀制を彼の工場に実施して全米の資本家から馬鹿だ気狂だと非難されつゞも、部分品の規格化と極度の分業による流れ作業を行うことに依つてアメリカに機械支配の時代を開いたのは 1914 年であつた。その時にスパナーを持たされてネヂ釘を廻す作業をあてがわれたものは、朝から晩まで一生涯の間ネヂ廻しをしつゞ過すべき運命に捉えられたわけである。

この分業と規格化の発展は産業界に於ては避け難い進路であつて何れの国も何れの工場もその方向に一日々々と進んで行く。ラスキンやモリスの生き々々とした夢を埋没し去つてひたむきに傾斜して行く世界文明がどこへ行きつくかを追求して行く時、この仕事の分業化に耐えて「生きて行ける」人間の像—それは各種各様の分業に適する夫々の性能と気質の人間の要求となり、必然的に Huxley の考える五階級の人間群の構想となつたのであろう。

全世界をあげて人間の平等を説きデモクラシイの道以外に世界を支配する真理はないと考えられている時、この作中に展開された如き階級のレッテルを明瞭に貼りつけられた人間像には意想外の驚きを感じるのである。しかもデモクラシイを国是として世界の指導的立場にあるアメリカの実生活の内部からこの深刻な矛盾が芽生えつゞあることを思えば、理念だけではどうにもならない現実生活の悪魔的な圧力に目を見はる思いである。H. G. Wells の *Utopia* にもサムライ階級の支配者と言うものがあるが、Wells の構想では、14 才迄は万人平等の教育を行い、その中から優れた者に 18 才迄高等教育を行い、更にその中からサムライ階級の志願者を撰抜する様になつている。そして職業の貴賤を考える人は一人もなく公的な仕事場を一步出たならば人々はすべて自然な平等の立場で交際しているのである。自然な当然な生活の様態としてこれは読者に納得されるのであるが、之に反して Huxley に於ける階級の意識は実に強く動かし難いものがあつて異なる階級の人々が平等に語り合う広場と言うものは全々考えられていないのである。

国の争を絶対的に抑えて服従させて行くことである」と言明しているが、人間生活の真摯なる探究者であり Russel を愛読した Huxley の心の中にこの言明は大きく意識されていたことと思われる。B. N. W. では科学と大国家と言う二つの要素を達し得る最高点にまで発展せしめているのである。それは全世界を一つにした国家であつて、全世界のどこに通話するにも電話で3分も待たされることは稀であり、交通はすべてヘリコプターでなされ、経済も政治も各個人の生活も極度に綿密に応用された科学性が行きわたっている。“Civilization is sterlization.”と言う言葉をこの新世界の支配者がモットーとしている如く実に清潔であり、そこには迷信も偶然性も殆んど残されて居ないのである。すべてが適確な実験と因果関係の追求による一厘の誤謬もない計算に従つて支配経営されているのである。

著者自身が「この B. N. W. の人々は健全とは言えないが、然し気狂ではない。彼等の目指す所は社会の安定性である。その為には科学を用いて徹底的に人間革命を行つたのである」(B. N. W. PP. 10—11)と言つている。彼の構想は冷静である。さすがに科学の洞察に充ちた適確な事実の把握と推理による未来世界の理想境が隠し、その素晴らしさに感動することも多い。然しそれよりも生活保障と社会安定の為に全能力を集中された B. N. W. が気狂ではないまでも不健全にゆがんで傾いて行く姿の方が読者の心には深い印象として残るのである。著者の胸の中に煙をあげてくすぶる諷刺の焔が絶えず感じられるのである。

(二) 階 級

B. N. W. に住む人間は $\alpha, \beta, \gamma, \delta, \epsilon$ の五階級に分けられている。人体にたとえば α は頭脳、 β は手、 γ は胃袋、 δ は肺、 ϵ は手足の如く各階級が集団に分れて夫々の分野で働いている。 α, β は支配階級者である。人間の卵の人工ふ化所長、育成所長、訓練所長、大学の教師等の職にある人々である。之に対して δ, ϵ 級の人間は労働専門の階級であつて人工ふ化の方法からして異つている。或婦人から切取った卵巣を生存させておいて、之を I cc 十万匹の密度で浮遊させてある別の精虫溶液に入れて十分間の後取上げて「ふ化器」に送られる。 α, β 階級は一卵一幼児一人主義で一卵毎にびんに入れて人工育成されるが、 δ, ϵ 級は Bokanovsky 法^(註)に依つて一卵から分裂させられて 80~96 人の双生児を得る様に処理されて行く。これは同一気質と性能を持つ 96 人の双生児が成長してから同一構造の機械 96 個を操作する完全な生産の規格化を企てたものである。B. N. W. の支配者は言う「旧世界では一人の人間を生み育てるのに 30 年かゝつた。だがこゝでは成長速度をうんと早めることが出来る。こゝでは 150 個の卵を作り出し、これを Bokanovsky 法で育成すると二年間に 150×96 即ち約 14000 人の人間—96 人づゝからなる 150 組の双生児群が出来るのである」と。

こうして育成された δ, ϵ 級の人間の労働生活は例えば成る照明装置工場では押つぶした様な扁平な頭の鼻らしいものもない 83 人の δ 人々が同じ型の機械を動かし、

A. Huxley の *Brave New World* の 構想を支えている思想について

上 村 盛 雄

文中の記号 B. N. W. は The Vanguard Library の *Brave New World* に依つたものであることを示し、E. M. の記号は Chatto & Windus 版の Huxley 集中の *Ends and Means* に依つたものであり、各記号の後に夫々の版に依る“頁”を記入した。

(一) その motif

「高い教養と感受性」を持つ作家というのが Huxley を評する評家達の一致する讃辞である。然しそれだけが彼の魅力ではない。彼の著 *Ends and Means* を読んで強く感じられる如く、あの高い智性と理想追求の情熱を以て現代に生きる為に如何に考え如何に悩んだか、その足跡を辿つて見る第一歩として B. N. W. を取り上げて見た。

この作品の発表は 1932 年であつて、その内容は 600 年後の世界を想像しての、人類文明への予言、諷刺、警告の書である。西欧文明は長い伝統を踏まえてゆるぎなく存在を続けるであろう。然し 20 世紀になつてアメリカ文明が全世界の目をうばいつゝ間断のない強力な生長をしはじめた。Huxley は明言しては居なくとも、その眼でアメリカ文明を見守りながら、この書ををかいたことが種々な言葉^(註1)から察しられるのである。

南北戦争前後から初まるアメリカ西部大資源の開発と之に並行する機械力の発達にはアメリカ人に如何なることでも為し得るとする自信を持たせ、更に 20 世紀に入つて“History is bunk”と言う自動車王フォードの放言となつた。「歴史は出たら目だ」と言うこの放言の時を、仮に Ford 紀元と呼び、之を新しい世界への出発の標識として、Huxley は伝統と歴史を無視して、ひたむきに物力を礼讃しその洪水と共に押流されて行くアメリカを中心とした現代文明の姿を見守つていたのである。

それが 1919 年ムツソリニ、ヒットラの出現以来強まつて来た全体主義^(註2) 1929 年の世界大恐慌と失業及之につゞく共産主義の攻勢^(註3) 1931 年日本の満洲進駐と言う世界不安の嵐となつた。B. N. W. はこの嵐の最中に書き上げられて 1932 年に発表された。

B. Russel がその著 *the Prospects of Industrial Civilization* (1923) に於て「科学の進歩と大国家の出現が善悪共に現代文化の中心問題であり、世界の混乱状態を考えると戦争防止の唯一の方法は super state^(註3) の出現によつて個々の